

湿地の現状分析

1. 湿地環境の現状

分析方法

961 湿地（湿地と生物分類群の組み合わせ）のうち、情報が得られた 875 湿地について、「顕著な変化なし」「改善傾向」「悪化傾向」と、（悪化傾向のうち、とくに）「選定根拠の種が長期にわたり未確認」と「湿地の消滅」、および「その他」の 6 つの現状に分け、生物分類群毎に、その湿地数と割合を整理した。

複数の情報提供者から異なる情報（例えば、「顕著な変化なし」と「悪化傾向」）が寄せられた場合には、情報の内容を総合的に判断し、いずれかのカテゴリーに分けた。



傾向

別紙 1に「湿地環境の現状」を示す。

- (1) 湿地の劣化は、すべての生物群に及んでおり、全体的に見れば、湿地環境は悪化傾向にある。とくに、淡水魚類、爬虫両生類、ウミガメの生息環境が悪化している
- (2) 一方、調査や保全・再生の取組が進められた結果、とくにサンゴ礁、淡水藻類、シギ・チドリ類などの鳥類については、環境が改善傾向にある湿地も見られた

2. 劣化の要因

分析方法

961 湿地（湿地と生物分類群の組み合わせ）のうち、「悪化傾向」にある 530 湿地（湿地と生物分類群の組み合わせ）のうち、劣化要因について情報のあった 351 湿地について、その主たる要因を以下のとおり分類した。

- ・ **「第 1 の危機」**（開発など人間活動による危機）
- ・ **「第 2 の危機」**（自然に対する働きかけの縮小による危機）
- ・ **「第 3 の危機」**（外来種など人間により持ち込まれたものによる危機）
- ・ **「第 4 の危機」**（地球温暖化や海洋酸性化など地球環境の変化による危機）
- ・ **「複合的要因」**（第 1 から第 4 の危機の 2 つ以上に該当するもの）



傾向

以下に、生物多様性の危機の視点に立った「劣化の要因」を示す。

- (1) 「第1の危機」、とりわけ埋め立てや護岸整備等の開発の影響が大きかった
- (2) 「第2の危機」では、ニホンジカやイノシシによる湿原植生への食害が多く報告された
- (3) 「第3の危機」では、淡水魚類などに対して、依然として、国外外来種のオオクチバスの在来種への捕食圧が大きいほか、モツゴなど国内外来種による影響がでている湿地もあった
- (4) 「第4の危機」の割合が「第1の危機」に次いで大きく、地球温暖化による海水温の上昇が、とくに藻場やサンゴ礁に見られた。ただし、東日本大震災により発生した津波や地盤沈下による影響もこのカテゴリーに含めたため、相対的な割合が増加している
- (5) 第1から第4の危機のうち2つ以上が主因となって、湿地環境の劣化を引き起こしている事例もあった

<参考>

12月10日時点

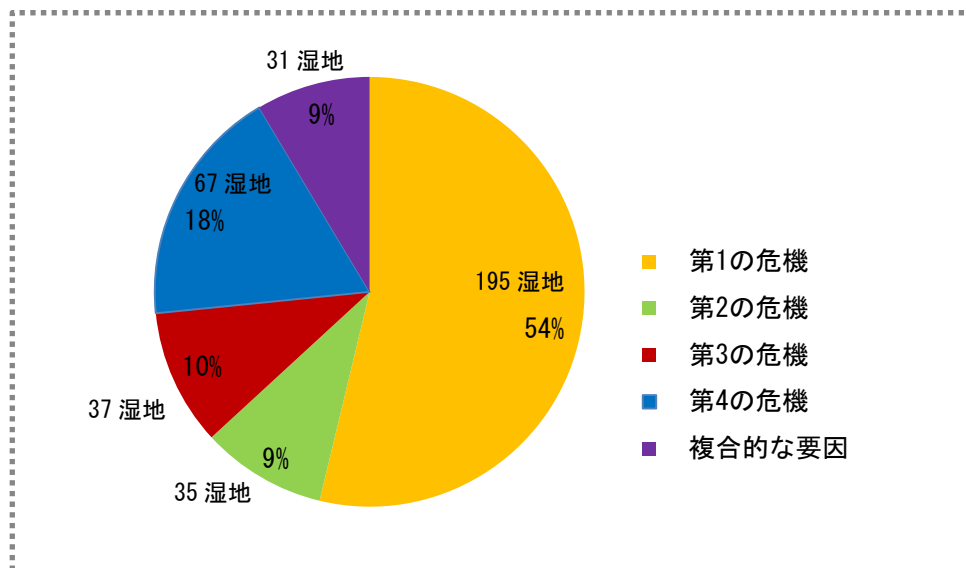
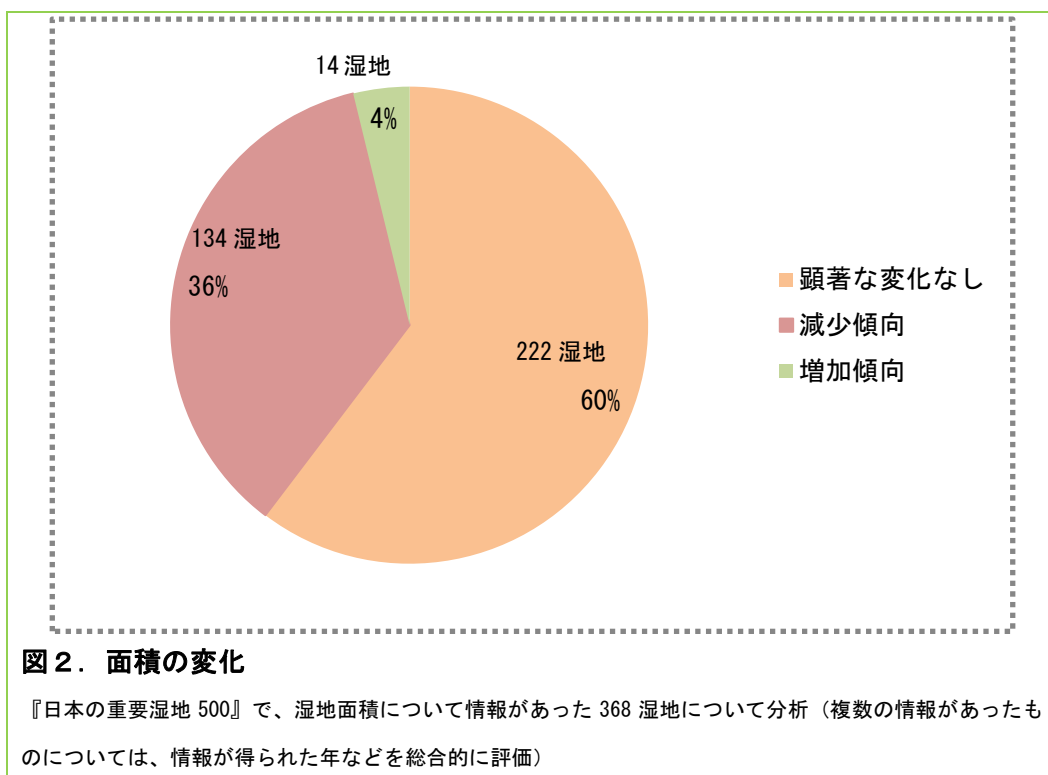


図1. 劣化要因

961 湿地（湿地－生物分類群の組み合わせ）で悪化傾向にある湿地のうち、劣化要因が示された 365 湿地について分析



3. 生物分類群毎の劣化要因（サンゴ礁の例）

分析方法

「悪化傾向」にある湿地（湿地と生物分類群の組み合わせ）のうち、劣化要因について情報のあつた湿地（湿地と生物分類群の組み合わせ）について、その主たる要因（件数）を分析した。



結果

サンゴ礁では、海水温の変動による、捕食者の増加による影響が多く見られた（第4の危機）。そのほかにも、陸域からの赤土の流入と堆積が、サンゴ礁を劣化させる要因となっている。

- ・ オニヒトデによる食害（7件）
- ・ 赤土の流入および堆積（3件）
- ・ 台風とそれに伴う濁り（3件）
- ・ 海水の高水温や低水温（3件）
- ・ トゲレイシダマシによる食害（1件）

以上